

六ヶ所台地の戦後開拓地における酪農地域の形成と現状

酒 田 孝

I 序 論

戦後、「緊急開拓実施要領」に基づいて建設された開拓集落は、日本における統一的な起源を持つ村落としては最も新しい。これらの戦後開拓集落は、主に稲作に適さない高冷地・乏水地に建設されたため、家畜を導入するケースが多く、各地に酪農地域を形成している。

そこで、この論文では、青森県の六ヶ所台地を例として、戦後開拓集落が酪農地域を形成していく過程と、現状について考察する。

II 対象地域の概況

六ヶ所台地は、六ヶ所村・東北町・野辺地町にまたがる、標高 60 m ～ 100 m の洪積台地で、ヤマセの常襲地帯であるため戦前までは広大な未墾地が広がっていた。

戦後になって、昭和 20 年代の緊急開拓・昭和 30 年代の国営機械開墾により多くの農家が入植し、「日本の満州」とまで言われたこの地域にも多くの集落が形成され、現在は県内最大の酪農地域となっている。

III 対象集落の抽出

本稿で戦後入植の酪農集落について分析を進めていく上で、戦後入植集落でかつ、酪農集落を対象とする必要があると思われるので、この集落を農業集落カードを用いて抽出する。1980 年の農業集落カードに記載されている 3 町村の集落は 98 集落であり、この中で乳牛を飼養している集落は 40 集落あった。さらに、これを乳牛飼養農家率と飼料作物収穫面積率を指標としてグラフに落とし、グルーピングを行い、13 の酪農集落を得た。これらは全て戦後入植集落であったので、これを対象集落として以下、論を進める（図 1・表 1）。さらに、この中から 5 つのサンプル集落を、入植年代・経営規模の差異を考慮して

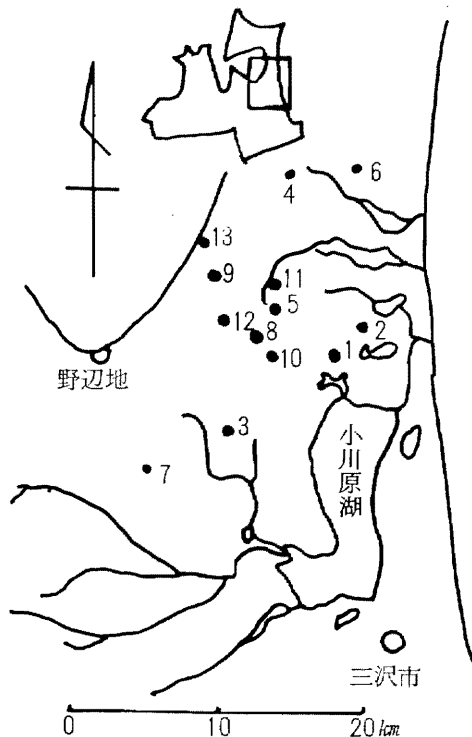


図 1 六ヶ所台地の概況
※ 数字は集落番号

表 1 対象集落の内訳

集落番号	集 落 名	入 植 年 次	現 在 戸 数	戸 当 り 耕 地 面 積	戸 当 り 乳 牛 頭 数	乳 牛 一 頭 当 り 耕 地
1	六 原	S 31 年	25 戸	14.3 ha	44.8 頭	32 a
2	八 森	31	22	17.5	40.5	43
3	輝 ケ 丘	32	26	10.5	36.3	29
4	第四雲雀平	33	7	10.7	21.5	50
5	睦 栄	34	15	10.9	27.3	40
6	富 ノ 沢	32	6	10.5	27.3	38
7	北 栄	32	63	7.9	35.0	23
8	豊 瀬	21・34	24	8.3	33.6	25
9	柵	26	14	7.9	22.2	36
10	庄 内	22	53	7.0	31.1	26
11	豊 原	25	12	7.9	27.6	29
12	美 須 々	24	20	7.2	25.0	29
13	目 ノ 越	21	21	6.5	27.8	23

※ 集落の位置を図 1 に示した。

(1980 年農業集落カードより作成)

選出した。集落名は、六原・睦栄・北栄・庄内・美須々である。

Ⅳ 六ヶ所台地における酪農地域の形成

1. 入植と乳牛の導入

昭和 20 年代の緊急開拓時には、農家は未墾地へ入植し自力で開墾していったが、一般に入植条件が劣悪であったため、脱落者が多く定着率は低かった。入植当初の営農形態は、雑穀・豆類・芋類を中心とした自給的農業であったが、昭和 27・28 年の冷害によって豆類を中心に被害が出たため、飼料作物へ移行していった。さらに、昭和 31 年から機械開墾が始まり、その影響で乳牛が積極的に導入されていった。

昭和 30 年代の国営機械開墾による入植は、緊急開拓の反省の上に、18 億円の資金と機械力を投下し、短期完成を目指して行われたため、入植条件は緊急開拓時とは比較にならぬほど整備されていた。当初の営農形態は、乳牛と換金作物を組み合わせた「畑酪」であったが、機械による開墾のため表土がはがされ予想以上に地力が低かったこと、主たる換金作物であったナタネ、ビートなどの市場での需要が少なくなったことなどの理由で、昭和 40 年代から酪農専業へ移行していく。

2. 離農と経営規模の拡大

入植集落が酪農地域を形成する過程は、同時に離農とそれにとまなう集落内の再編成による経営規模拡大の過程であった。

青森県内に戦後入植した農家は 7,500 戸にのぼるが、現在残っているものは、おそらく約半数に

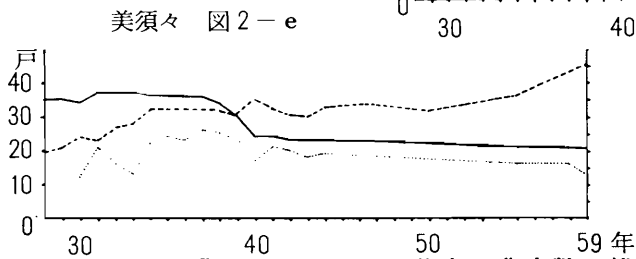
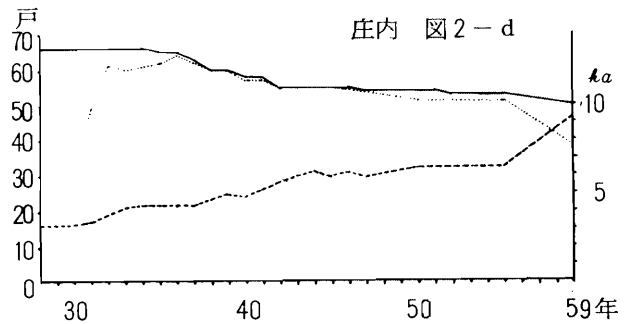
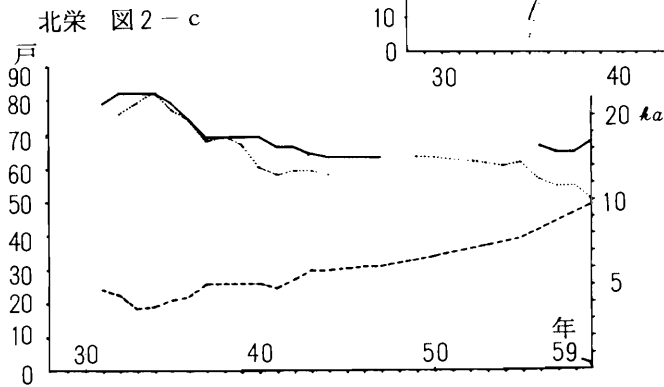
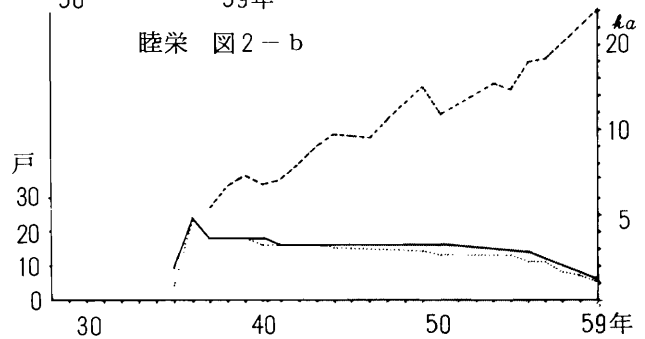
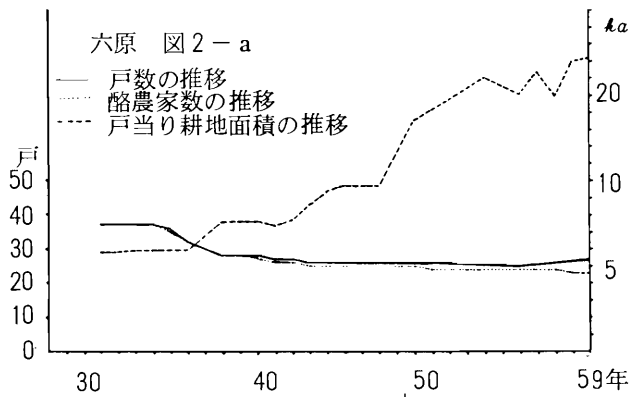


図2 a~e 集落内の農家数・耕地面積の推移

('80 農業集落カード・開拓地営農実績調査・農協資料などにより作成)

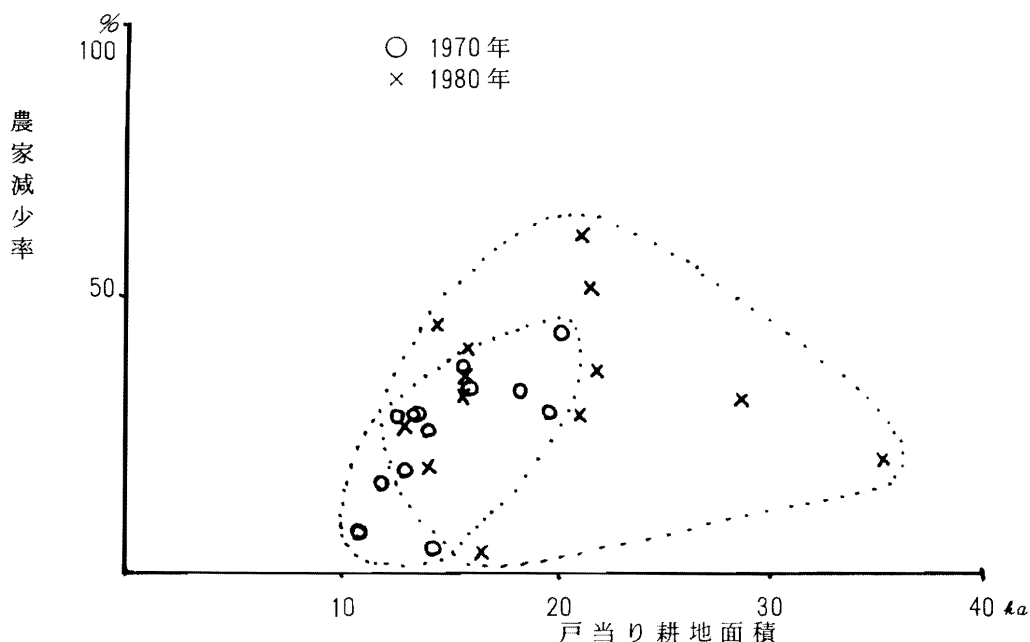


図3 経営耕地規模と農家減少率の関係

1970 年の相関係数： $r = 0.66$

1980 年の相関係数： $r = -0.01$

(’80 年農業集落カード，開拓地営農実績調査より作成)

過ぎないであろう。また，昭和40年に7,170戸存在した酪農家は，昭和58年には18%の1,160戸にまで減少している。

入植農家の入植時の耕地は，5ha前後であるが，この面積での酪農専業への移行は不可能であり，皮肉にも脱落者の跡地を利用し，耕地面積を拡大することによって酪農専業へ移行していった。

図2からわかるように，六ヶ所台地においても，入植から現在まで離農と経営規模拡大の傾向は続いているが，その内容は昭和40年代後期を境に大きく変化している。

昭和40年代後期以前は，離農は入植の失敗・営農の挫折といった農民側の原因と，過剰入植対策事業（昭和35～38年）・離農対策事業（昭和39～47年）といった行政側からの離農政策によって起ったが，その跡地は主として，集落内の残留入植者に分配され，結果として集落内の経営規模の拡大をもたらした。これによって離農率が高い集落は経営規模が大きいという傾向が見られた（図3）。

3. 近年の変化

昭和40年代後半以降は，図4に見られるように，大型資金の融資が開始されるなど，経営規模の拡大が行政側から積極的に進められたため，入植農家は集落内の離農跡地の取得だけではなく，集落外に借地によって耕地を拡大していった。このため，以前まで見られた集落内の農家の減少率と経営規模の相関は，全く見られなくなった（図3）。

しかし，昭和53年から始まる生産調整・原料乳価の低迷などにより，大型資金導入時の計画通

りの生産の拡大・借入金の返済が困難になり、負債がこげついて離農する農家が増大している。近年の酪農家の減少が特に大規模層に顕著である、という事は上記のことをよく裏づけている。

V 六ヶ所台地における酪農経営の現状

1. 経営規模

六ヶ所台地の13の酪農集落を、その経営規模について見ると、昭和20年代入植集落・昭和30年代入植集落の間に明確な差が認められた(表2)。これは、昭和20年代入植農家が自給的農業を目指して入植したために、昭和30年代入植農家のように、大型資金を導入して規模を拡大していくという拡大意欲が低いからであり、両者の借入金額の差にもこれが示されている。

この事は、昭和20年代の緊急開拓・昭和30年代の機械開墾の入植条件が現在もなお、この地域の集落を性格づけている、という事を示している。

2. 耕地保有の形態

耕地の保有形態は、集落の形態に大きく影響される。六ヶ所台地の酪農集落は、ほとんどが散村形態をとっており、サンプルの5集落を分析するとその土地保有の形態は①入植当初から所有する宅地に付随する大団地、②離農者の跡地を分配した集落内に散在する小団地、③集落外の借地、の3つに分けられるが、近年、借地の比重が高まり50%を越える集落も見られ、経営の不安定要因となっていると同時に、数10Km離れた場所の耕地を利用することなどによって労働効率を低下させ、機械化に拍車をかけている。

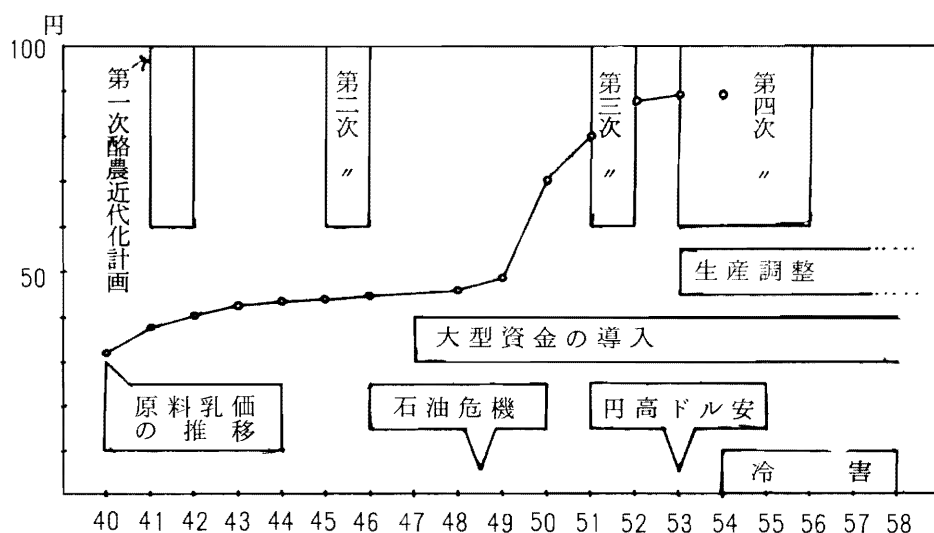


図4 酪農をめぐる状況

表 2 入植年次ごとの経営規模平均

	20 年 代 入 植	30 年 代 入 植
戸 当 り 農 地 面 積	730.0 a	1,176.5 a
戸 当 り 乳 牛 頭 数	26.74 頭	33.24 頭
1 頭 当 り 耕 地	27.3 a	35.4 a
水 田 率	1.64 %	0.48 %

各集落の平均を入植年次ごとに集計した。但し、豊瀬は 20 年代と 30 年代の農家が混在しているので除いたため 12 集落のデータ

(1980 年農業集落カードより作成)

この地域の集落は、もともと全てが散村形態だった訳ではなく、昭和 20 年代に入植した集落の多くは、共同で開墾作業を行う必要性などから入植後しばらくは集村を形成していたが、労働効率が悪いので自分の耕地に移転し現在のような散村を形成した。その中で庄内だけは、現在もお唯一集村形態を維持している。興味深いのは、庄内が集村形態と同時に農協の独立などに見られるような共同体としての精神的な結束をも維持している点である。

一方、昭和 30 年代入植の集落は、開墾作業の必要がないため散村として計画された。

3. 経 営 状 態

東北地方の酪農は、形態としては北海道型草地酪農に分類される。粗飼料の自給によって生産コストを低くおさえ、最大限の利益を得ようとするこのタイプにとって、乳牛一頭当りの耕地面積の広狭は、経営を左右する要因である。

この点を表 1・2 で見ると、昭和 20 年代入植の集落と北栄の頭当り耕地が非常に少く、生産コストの割高が予想されたので、農家の一頭当りの耕地面積と牛乳 1 Kg 当り経費を、六原・北栄・庄内のサンプル集落の全ての酪農家について調べたところ、両者の間に相関は全く認められなかった。むしろ、北栄・庄内の一部の農家に、耕地面積とは無関係に頭数を拡大している農家群が見られた。これらの農家の経営内容は、いずれも理想的なものであった。

しかしながら、六ヶ所台地の酪農家は、全般的に借入金額が多く、過剰投資傾向が見られ、これが経営を圧迫している最大の要因であり、この地域の共通の課題となっている。

VI 結 論

戦後入植集落は、日本で最も新しく発生した村落で、そのため入植時の条件が今なお集落の性格

に影響を与えているのが認められる。

政策（緊急開拓事業実施要領）によって生み出されたこれらの集落は、必然的に政策を色濃く反映しながら変化して来たが、入植後数十年を経過した今日でも変化は継続しており、今後も変化していくであろう。

青森県における六ヶ所台地周辺は特に、むつ小川原開発・核燃料サイクル基地計画の影響を直接うけている地域であるため、状況は予断を許さない。

この研究を完成するにあたって指導・助言を与えて下さった今井先生、水野先生、後藤先生、そして資料を提供し協力して下さいった役場・農協・開拓農家の方々に深く感謝します。

【参考文献・資料】

- 菊地俊夫（1982）：那須山麓戦後開拓地における酪農発展と空間パターン 地理評 55－6
359～379
- 塚田秀雄（1971）：上サロベツ原野周辺の開拓と酪農 人文地理 23－3， 1～39
- 宇野忠義（1983）：酪農経営における負債問題と対応策 農業と経済 1983年6月号，
52～61
- 青森県農林部：「青森県開拓地営農実績調査」 昭和28～47年
- 青森県農林部：「青森県家畜のあゆみ」 初版～第四版
- 青森県（1975）：「青森県戦後開拓史」